KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

Y. OKAKURA AND S. ICHIKAWA

GENERAL EDITORS

KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書

大正十五年五月十日 印刷　　大正十五年五月二十日 發行

主幹者　岡倉由三郎

主幹者　市河三喜

發行兼印刷者　小酒井五一郎
東京市麴町區富士見町六丁目七番地

印刷所　研究社印刷所
東京市麴町區飯田町六丁目一番地

發行所　研究社
東京市麴町區富士見町六丁目七番地
電話四谷二九五五番
振替口座東京二八六〇一番

非賣品

(芝赤羽橋 新榮社製本)

Kenkyusha English Classics

THE COMPLEAT ANGLER,

OR, THE CONTEMPLATIVE MAN'S RECREATION

BY

IZAAK WALTON

WITH INTRODUCTION AND NOTES

BY

Y. OKAKURA

LATE PROFESSOR OF ENGLISH IN THE TOKYO HIGHER NORMAL SCHOOL

TOKYO

KENKYUSHA

1926

序

幼少の頃自分の住んでゐた日本橋の蠣殼町は父の藩主の松平春嶽公のお下屋敷の開放されたもので、その東北の一隅には明治の初年に、またお庭の一部を成した廣々とした池があつたが、子供心には極めて大きく見え、荒れてはゐたが、中々と配置な美に富んでゐたものらしかつた。その池のまはりは、近所の子供達のよい遊び場で、大小の丘を飾る樹木や熊笹を大道具小道具として戰ごつこや鬼ごつこに芝生の小路を飛びまはり躍ねまはりしたものだつた。岸邊の淺い所へ、家へは内證で、はだかで腰まで浸つて、石や棒杙に抱きついてゐる小さな海老をつかまへたり、群れて游いでゐる目高をしやくつたりした夏の日中も隨分あつた。をりをりは又釣道具を持ちあるいて、小さな鮒の一二尾を半日かゝりで魚籠に收め得た時もあつた。他の釣り手には竿の幸(ﾐﾁ)が頻りたのに自分だけ獲物のない時のくやしまぎれに、尻を出じて河伯でも釣らうよ、と棄ぜりふを言ひながら、釣竿逆手に、靜かな水の面を、がばがばと搔きまはしたり、大小の石を投げこんで池の中心に無用の波紋を起こしたりした。また、たまさかには辨當持參で程遠からぬ深川まで出かけて、木場の堀割りに浮いてゐる材木の上に立つて、確と目に見えてはゐても中々釣りあがらぬダボはぜに一日の守をして貰つたこともある。自分は斯くして釣の樂みをは夙く味はつて見た。併し何事にも甲斐性のない身は技術の上達に由つて起こるその中の眞の趣には遂に接し得ず、唯深い感興を門外のかいのぞきから懷いて釣魚の道につきせぬ敬意を致すのみで今

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook

日に及んでしまつた。さうした立場に居る自分には、八犬傳を十餘歳で初めて讀んで、市川の邊りで釣りしてゐる小文吾の父文五兵衞の事を叙する一節の、『夏を忘るゝ浦風に、蘆の風戰ぎて、夕陽の影を紊し、水や空なる走り帆に、沙鳥(ゴイ)飛びて、江山の雲に入る。江に臨み石に坐する時、萬事たゞ無心なり、竿を揚げ綸(ミ)を垂るる時、三公にも換へがたし、と古人のいひけん宜なるかな。一波動きて、萬波皆從ひ、細鱗踊つて、巨魚あるを知る』とあるあの文句が、今以て頭を去らない。やゝ長じて、能の「鵜飼」を觀た時、釣とは違ふが、河浪にはつと放たれた鵜どもが『底にも見ゆる篝火に、驚く魚を追ひまはし、かつぎ上げすくい上げ、隙なく魚を喰ふ時は』と云ふ叙景のあたりに入つては

『罪も報も後の世も、忘れはてゝ面白や』

と、つくづく身につまされておなじ感興に浸つた。更にまた後に Wordsworth の *The Prelude* の中で、

"the rod and line,
True symbol of hope's foolishness, whose strong
And unreproved enchantment led us on
By rocks and pools shut out from every star,
All the green summer, to forlorn cascades
Among the windings hid of mountain brooks."
(Book I, ll. 485–490.)

に出遇つた時も、會心の微笑が自ら催された。それもこれも皆少年の頃の越前樣の下屋敷の庭の池の鮒や深川の木場のダボはぜの敎へてくれた樂みに根ざしてゐるのである。

自分が Walton とその *The Compleat Angler* の名に親しんだのは何時の頃か判然せぬが、多分 Lamb の "Old China" を讀む際、姉の Mary (とはせず Cousin Bridget として)の詞として、貧時の二人のたまの散歩の樂みを說いて、"Then, do you remember our pleas-

ant walks to Enfield, and Potter's Bar, and Waltham, when we had a holiday—holidays, and all other fun are gone now we are rich—and the little hand-basket in which I used to deposit our day's fare of savoury cold lamb and salad—and how you would pry about at noontide for some decent house, where we might go in and produce our store—only paying for the ale that you must call for—and speculate upon the looks of the landlady, and whether she was likely to allow us a table-cloth—and wish for such another honest hostess, as Izaak Walton had described many a one on the pleasant banks of the Lea, when he went a-fishing—and sometimes they would prove obliging enough, and sometimes they would look grudgingly upon us—but we had cheerful looks still for one another, and would eat our plain food savourily, scarcely grudging Pisactor his Trout Hall?" と記してある條から「釣魚大全」その者に好奇の心を起こすことになつたものと思ふ。Lamb はこのほかに Walton を喜び「彼の名の出てゐる處ならはその頁に限らず」之を尊重する旨を Wordsworth への文通の中に認め、Coleridge にも夙に本書の一讀を薦め、その著者をは『生ける友人であるかの樣に常に愛した』のであつた。それは魚を捕へる技巧の方面に於て記事が正確であつたからではなく、全體としての本書の筆致が、叙景に於て典雅であつたのみならず魚類に關する所用の語句が如何にも夢幻的に世はなれて、まるで支那の古い半は作り話の地理書に似て、夙い頃の芝居を觀る感が多かつたからに相違ない。試みに山海經を開いて見ると、開卷第一の南山經の條に『又東三百里曰柢山、多水無草木、有魚焉、其狀如牛、陵居、蛇尾有翼、其羽在鮭下、其音如留牛』と見え、鮭の字を註して「亦作脅」とし脇腹の事であると示してある。どうやら水牛の妖怪らしい品物。それから更に又東の方三百里に青丘の山と云ふのがある。英水これより出で南

に流れて卽翼の澤に注ぐ。『其中多赤鱬、其狀如魚而人面、其音如鴛鴦』と記して、その次に「食之不疥」と効用まで示してあるのは誠に嬉しい。どうかさう云ふ奇魚靈獸の居る國に訪ねて行つて見たいもの。また西山經の記事の中に『又西百八十里、曰泰器之山、觀水出焉、西流注干流沙、是多文鰩魚、狀如鯉魚、魚身而鳥翼、蒼文而白首赤喙、常行西海、遊於東海、以夜飛、其音如鸞雞、其味酸甘、之食已狂、見則天下大穰』とある條などは 若し Lamb に讀んで聞かせたら、どんなに喜ぶか知れないであらう。彼の友の支那通の M(anning) は、かゝる奇拔の書物の存在を、いつか彼に語つたらうかしら。さうだつたら、"Roast Pig" 以上の珍味が彼の Elia 隨筆に今一篇加へられてゐたはずであるが。

本書が今日の讀書界にその文學的生命を立派に持續して行く所以は他にもあらうが、主にはやはりこの、三才圖繪的の雅味が基調を成してゐると言はねばなるまい。Lamb その他の文人がこの書を愛する所以も亦蓋しその夢幻の世界の淸く淋しい逍遙に共鳴するが爲であらう。故に之に註釋の筆を執ることを敢てする者は自分の樣な、釣魚の術との親しみから云つても亦、神韻漂渺の理想鄕との理解から云つても、遺憾ながら殆ど無資格の者であつてはならぬはずなのである。しかるを今この大事業を辭退もせず之を試みたのは、この難事を引受けてくれさうな適當の方々に必要な閑日月が無かつたことに外ならない。それで自分は手許の二三の參考書を相手に兎に角終まで註釋を加へた、そして總釋の一篇をも斯く書き誌すに至つた。其際自分が時々繙いて益を得た書には、

1. Alfred W. Pollard の短い "Bibliographical Note" の附いた *The Complete Angler* (Part I) *and The Lives of Donne, Wotton, Hooker, Herbert, and Sanderson.* 2 vols. (London, Macmillan & Co., 1901.)

2. Andrew Lang の "Introduction" の附いた *The Complete*

Angler (Part I). (London, Dent & Co.) *Everyman's Library* 中の一册。

3. Austin Dobson が餘白見出 (marginalia) を添へ且つ卷末に "Notes" をも加へた、*The Compleat Angler* (Part I). (London, Dent & Co., 1905.) *The Temple Classics* 中の一册。

4. A. B. Gough の "Introduction" と T. Balston の "Notes" とを添加した *The Compleat Angler* (Parts I & II). (Oxford, at the Clarendon Press, 1915.)

5. G. Christopher Davies の "Notes" の附いた *The Complete Angler* (Parts I & II). (London, Frederick Warne & Co. [1878]) *The Chandos Classics* の中の一册。挿畫がある。

6. Richard Le Gallienne の "Notes" を添へた *The Compleat Angler* (Parts I & II). (London, Jone Lane. [1897]) Edmund H. New の挿畫が澤山ある。

7. R. B. Marston の "Introduction" と "Bibliography" との附いた *The Compleat Angler* (Parts I & II). (Oxford, Humphrey Mitford, 1921.) 二十二の圖版が挿んであつて重寶である。

8. R. B. Marston の edit し arrange した "The Lea and Dove Edition" of *The Compleat Angler* (Parts I & II). 2 vols. (London, Sampson Low, &c., 1888.) この 4to 版大本二册は 500 部だけの限定版で編者が一本ごとに自署してゐる上に Westwood + Satchell の "*The Chronicle of the Compleat Angler*" が卷尾に添へてある。これは 1653 年初版以來の第百版と云ふ意氣込もあつて大分眞劍に編まれたものであるがその後の詳細の調査で、1885 年に二部、1886 年に一部出た版の見落しがあつたことが後に知れたので、實は "the 103*rd* edition" になつたわけ。これが自分の所有の中の一番立派な本で五十四個の寫眞版と百ほどの木版の小形なカットが挿入してある

がしかし今一册、それにも增してなほ貴重な edition が座右に置かれてゐる。それは次のものである。

The Compleat Angler (Parts I & II), "with Copious Notes, for the most part original, a Bibliographical Preface, giving an account of Fishing and Fishing-Books, from the earliest antiquity to the time of Walton, and a Notice of Cotton and his Writings." でそれに illustrative ballads, music, &c. が附錄してある、今日ではかなり數の少い書本で New York の Wiley and Putman から 1847 年に出版されたもの。編者はたゞ "the American editor" とばかりで署名はないが Dr. George W. Bethune, D. D. と *The Chronicle* に出てゐる。

この本書の味讀の資料として貴重な書籍を自分の傍に暫く置くことを許されたのは、釣魚の道に於ても深い趣味と了解とを有せられる早稻田大學の勝俣銓吉郎氏であることを玆に記して氏の好意に感謝の意を表し且つは、かゝる珍藏の書を一時なりとも門外に置かれた寂寥不安の御心持のお詫言を謹んで申し述べる。

自分ごときが本書に關係を持つた事を今更のやうに不可思議にも亦をこがましくも感ぜられる。Iz. Wa の君、冀くは自分の斯くて犯す不遜の罪を赦させたまへ。

大正十五年三月　　岡倉由三郎

INTRODUCTION

I. 本書の聲價

出版の當初にいたく廣い世間の視聽を動かして、謂はゆる洛陽の紙價も爲に高くなるほどの著作も、諸行無常の大道に抵抗の由もなく、盛衰に長短前後の多少の差はあるにしても、いづれも同じ野邊に咲く花、早晩は吹きまくる忘却の風に拂ひ去られ、古書目錄の片隅に時代の塵の下積となつてゞも世に名を留め得るは中々の僥倖と見べきである。そのはかない運命を免れて、1653年に初版の出て以來二百七十餘年を經た今日、本書が一向にその聲價を落さぬのみか、世態人情が日々に複雜に成りまさつて物事がとかく純朴の姿を失ひ徒らに煩瑣に赴くにつれて、釣竿を手にして川端柳に一介の身を凭らせる暇も嗜好も持ち合せぬ人々まで、之を殆ど唯一人の友に「リイの川」の流を汲み「鱒の家」の昔を偲ぶ男女の數々は益々その數を加へるのは何の爲であらう。想ひ起こすさへ身ぶるひの出る、つひ先頃のヨーロッパの大戰の眞最中に於て本書の賣行きは反つて平時に數倍したと云ふ、それはまた何のよい處に慕ひ寄つての奇現象か。

本書に對しての愛好は昨今に於ても尙かく盛んであるが、それに對して賞讃の辭を吝まなかつた一流の文人は昔から尠くない。その中に就いても、よく引合に出されるのは、あのいたましくも心の强い沈勇の士 Charles Lamb である。あの物靜かな人が、まだ若いころ、親友の Coleridge に寄せた書簡の中に、

"Among all your quaint readings, did you ever light upon Wal-

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook

ton's Complete Angler? I asked you the question once before; it breathes the very spirit of innccence, purity, and simplicity of heart; there are many choice, old verses interspersed in it; it would sweeten a man's temper at any time to read it; it would christianize every discordant angry passion; pray make yourself acquainted with it" (Oct. 28, 1796).

と述べてゐる。あれ程の文人がこれ程の讃辭を敢てするには何物か本書の中に彼の心持を動かしたものがあつたに違ひない。

また隨筆文の達人として Lamb と並び稱せられる William Hazlitt はその隨筆集 *Round Table* の中の一篇に於て本書に關する次の叙述を公にしてゐる。

"We have another English author, very different from the author of John Buncle, but equal in *naïveté*, and in the perfect display of personal character; we mean Isaac Walton, who wrote the Complete Angler. That well-known work has an extreme simplicity, and an extreme interest, arising out of its very simplictiy.....He gives the feeling of the open air. We walk with him along the dusty road-side, or repose on the banks of the river under a shady tree, and, watching for the finny prey, imbibe what he beautifully calls 'the patience and simplicity of poor, honest fisherman.' We accompany them to their inn at night, and partake of their simple, but delicious fare, while Maud, the pretty milk-maid, at her mother's desire, sings the classical ditties of Sir Walter Raleigh. Good cheer is not neglected in his work, and more than in *John Buncle*, or any other history which sets a proper value on the good things of life. The prints in the 'Complete Angler' give an additional reality and interest to the scenes it describes. While Tottenham Cross shall stand, and longer, thy work, amiable old man, shall last!"

但しこの文の中の "John Buncle" は Thomas Amory (1691–1788) 著の *The Life and Opinions of John Buncle, Esq.* と云ふ自叙傳ともつかず、宗教論とも哲學談ともつかぬ物語である。

上に掲げた Lamb と Hazlitt との鑑賞の態度から見ても、本書は必ずしも釣魚に關する實際的の注意を讀者に願つことを本來の目的とするものではなく、要は著者の好む道の釣魚の物語を緣に一種の靜寂な淸く美しい自然の光景を讀者の想像の眼に寫し出し、それに由つて俗界の紛擾を忘れ、人の世の五慾の垢を洗い落さうと努めてゐる著者の眞心の迸りであることが一通りは窺はれる。實に本書の中に載せられてゐる五日間の記事二十一章數萬言は、詩の三百篇と同じく "the very spirit of simplicity" が之を一貫してゐる、最もよい意味での "*naïveté*" が之を一貫してゐる、曰く「思無邪」である。著者はその作の中を縱橫無盡に流れてゐる無邪氣の感じ純一の心持を、決して態と出さうとしたのではない、それを道具として使つたのではない。釣道に對するその眞摯な敬意から、そのまじめの信仰から知らず識らず之を筆端から滴らせたに過ぎない。その小兒のやうな天眞さは、筆路に品位を添へ不純の考から生ずる淺薄な技巧を不可能にしたのである。それが純眞な Lamb の心を、淡白な Hazlitt の情を動かしたところなのだと自分は思ふ。

若しこの地點から本書を觀察せずに、釣魚の術に關する實用上の指南を之から求めるとすれば、それは失望に終るほかはない。Sir Harris Nicolas の指摘したやうに、本書の開卷第一の着筆振からが 1599 年に London で印行された *A Treatise of the Nature of God* の冒頭の詞にその範を採つたもので、その書の書き起こしの Gentleman と Scholar との對話は次の通りである。

Gent. Well overtaken, sir!

Scholar. You are welcome, gentleman.

また本書のこゝかしこの行文が 1496 年 Westminster 版の (Dame Juliana Barnes の著とされてゐる) *The Treatyse of Fysshynge wyth an Angle* 中の詞と殆ど同じであることも知れてゐる。これは Walton が直接に *Treatise* から記事を轉載したのではなく、その中次の役を勤めた *Barker's Delight; or, The Art of Angling* (1651, 1657, 1659, London) に據つて筆を運んだが爲であると云ふ。とにかく Walton の言葉は引用の事實を明かに記してゐない場合にも必ずしも他人の言に基いてゐないと定めかねることも言へる。その上魚類の發生成育、形狀などの談に至つては、主として

Claudius Ælianus: *De Natura Animalium.* 1565.

Ulyssess Aldrovandus: *De Piscibus.* 1638.

Francis Bacon: *Sylva Sylvarum; or, a Natural History in Ten Centuries.* 1627.

Guillaume De Salluste, Sieur Du Bartas: *Du Bartas, his Divine Weekes and Workes* (English translation). 1614.

William Camden: *Britannia* (Engl. trans.). 1637.

Michael Drayton: *Poly-Olbion.* 1612.

Janus Dubravius: *De Piscinis et Piscium.* 1559.

John Gerard: *The Herball;* or, Generall Historie of Plantes. 1633.

Conrad Gesner: *De Piscibvs et Aqvatilibvs.* (No date.)

„ „ : *Historia Naturalis Animalium.* 1551–58.

Ferdinand Mendez Pinto: *The Voyages and Adventures of Ferdinand Mendez Pinto.* 1653.

Gulielmus Rondeletius: *Libri de Piscibus Marinis.* 1554.

Pliny the Younger: *The Naturall Historie of C. Plinius Secundus* (English trans.). 1601.

Hippolytus Salvianus: *Aqvatilivm, Animalivm Historæ.* 1554.

の如き書物に據つて說を立てたのみでなく、それらの書物(の多くの場合には譯本)に見える事項を、極めて如何はしく思はれる說に至るまで、其儘信じて辨別なく引用してゐる。この點のみを氣にして、本書全體の文學的價値がその古雅な文章に包まれた古風の脫俗味にあることを認め得ない謂はゆる實際的な實用本位の人々には昔から、本書は往々荒唐無稽の說話の庫で釣道に益のないものと考へられるのである。現に本書の出版された 1653 年に於て既に之に對して大々的の不滿を懷いた Richard Franck (1624?–1708) と云ふ、當時の國會黨の軍勢に屬した大尉がゐて、*Northern Memoirs* と題する一書を 1694 年に出版し、Theophilus と Arnoldus と云ふ二人の假想の人物を出し Arnoldus の口を藉りて Walton が Dubravius その他の人々から盛んに引用の語句を列べはするが、自ら實驗の敎は唯の一つも無い、と苦情を言はせてゐる。之に對して Theophilus は驕揚な態度で "I remember the book, but you inculcate his errata; however, it may pass muster among common muddlers" とその書の問題にするにも足らぬ俗書であることを諷し、更に Arnoldus の抗辯として "I remember in Stafford I urged his own argument upon him, that pickerel weed of itself breeds pickerel.' Which question no sooner stated, but he transmits himself to his authority, viz., Gesner, Dubravius, and Aldrovandus, which I readily opposed, and offered my reasons to prove the contrary" と言はしめ、とゞのつまり本書の著者は答辯に窮し、議論を止めて急に立去つた、と記してある。但しこの茶の無い大尉は、自身なかなかの釣師であつて、Walton の最も不得意であつた salmon-fishing にかけては大にその技に長じてゐると見え、之に關する叙述が多量に上述の書に載つてゐる。

要するに本書に對する吾々の態度は、之を實用一點張の視方から論ずべきでなく、實際の釣道の書としても全然無價値では勿論

ないが、その眞價は正に本書の著者が釣魚を所緣に雜鬧の浮世の塵を餘所に平然として當時の擾亂の圈外に心の靜けさを樂しみ得たその脫俗味を賞翫すべきなのである。この事は本書の著者の長い一生の周圍に吹き荒れてゐた政界の風浪を想ひ合せても大に合點が行く。

II. 著者の生涯とその時代

英文學史の傳へる所に據ると本書の著者 Isaak Walton は西曆一五九三年の八月九日にイングランドの中部の一州 Staffordshire の首府 Stafford 市で、その地の一小地主 (yeoman) の子として生れ、同じ月の二十一日に同所の St. Mary 敎會の管區で洗禮を受けてゐる。

1593 年と云へば英國史上では處女王 Elizabeth の在位の第三十五年目で、一時は彼女に取つて極めて手强い政權爭奪の敵手であつた Mary Queen of Scots——妖艶にしかも權謀に富み、奔放不羈の行動は、誠に古今に稀に見る怪女性と生れながら、天運つたなくして事はとかく志と相反し、スコットランド國の女王として、佛國の皇儲に嫁し、この兩國の外に、庶腹の故を以て Elizabeth を退け、自ら蘇、佛、英三國の女主たらんことをさへ企て、その事漸く成らんとした時、夢は、夫 Francis II. の逝去のために破れそめ、遂に政治と宗敎との仇がたき Elizabeth その人の手で一旦 Carlisle の獄に繫がれ、後遂に Fotheringay に於て、姥櫻の眺めもまた一しほ美しかつた四十五歲を一期に、刑場の露と消えた、かの Mary Stuart——の死滅の年 1587 年を去ること僅に六年で、その翌 1588 年には我が蒙古襲來にも比べつべきスペイン王フィリップ二世の例の無敵艦隊が大小およそ一百三十隻、舳艫相啣んで英國海峽に押寄せ國難は玆に迫つたのであつたが、我が國の塲合に似て一種の神風の助もあつて、敵は反つて全滅の厄に遭つた。この名高い海戰に於て指揮の大任に當り約八十隻の英國艦隊に號令したの

は提督 Lord Howard of Effingham であつたが、Drake, Hawkins, Frobisher, Raleigh など云ふ剛の者も之に參加してそれぞれに偉勳を建てた。これらの武夫どもは、アメリカ新大陸の發見以來、急に擴げられたヨーロッパ舊世界の驚異の眼を強く見張つて、海の内外に國運の進展に大に力を致した聲名の高い人々であつた。

當時の英國の氣運を新にして大に進取の勇猛心を誘つたものには、アメリカ大陸との接觸が主要なものである事は勿論であるが、更にまた當時より溯ること更に二三世紀の昔から南歐の一角に漸く萠ざして來た、謂はゆる文藝復興の波は、今まで世の極(はて)とはかり一圖に思ひつめてゐた大洋の波濤の彼方に更に廣大な陸地が現存することの發見に由つて、冒險の念が航海者の胸に新に燃えたゝせられたと同じ勢を以て、古代の偉大な文化とそれを示してゐる典籍及び美術工藝の遺品の發見に由つて、深く文藝の道に心を捧げてゐた人々の眼界に、新に宏漠たる精神上の大國土を展開し來つたのであつた。その知識界の新天地の發見の影響は次第に北漸して十五世紀の末葉には英國にもその結果と見べき學風新に生じ、Thomas Linacre (*cir.* 1460–1524), William Grocyn (*cir.* 1446–1519), John Colet (1467?–1519), Sir Thomas More (1478–1535) などの手に由つて Oxford その他に New Learning の氣運が漸く熟するに至つた。William Caxton (*cir.* 1422–1491) に由つて英國に傳へられた印刷の術はこの新運動、新氣運の傳播を力强く助け、1485 年には既に Malory の *Le Morte d'Arthur* が Caxton の手で出版せられ、同じく Caxton が、これは西部 Flanders の都 Bruges で出版した「トロイ物語集」(*Recuyell of the Historyes of Troye*) と共に新奇の趣に富んだ武勇談を讀書界に提供してゐたのである。

一面に於てまた、ドイツに在つては Luther (1483–1546), スキスに在つては Zwingli (1484–1531) の唱道の下に次第に氣勢を高めて來た新教の教理は Henry VIII. の世に至つて英國の國教の

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook